

# 『シルヴィーとブルーノ』考—— 写真家-小説家としての L. キャロル

平 倫 子

## I. 序

チャールズ・ラトウィジ・ドジスン (ルイス・キャロル, 1832~1898) の生涯は、アリス・リデルとの邂逅 (1856) を境に二分する見方が一般的である。しかし彼の一生を概観するとき、以下のようにほぼ 12 年周期で転期があったことが浮き彫りになる。それらは目立った出来事にかくれ見逃されがちであったことから、ここでは周縁にありながらしかも晩年の長編『シルヴィーとブルーノ』正, 続編の成立に深く関わっていると思われる三つの転期を一次資料にそって詳しく見てゆく。あまり読まれていない『シルヴィーとブルーノ』を読みやすくすることが本稿のねらいである。

第一期は生年から始まるダーズベリー時代の 11 年間である。第二期は 1843 年ダーズベリーからクロフトに移り、家庭回覧雑誌に没頭する 12 年間に含まれる。このことについてはすでに拙論「ルイス・キャロルの子ども時代」および「ルイス・キャロルの家庭回覧雑誌——*Sylvie and Bruno* の萌芽として——」で考察しているので、ここでは省く。

第三期は 1855 年に始まる。この年彼はクライスト・チャーチ・カレッジの図書館司書補および数学講師になり、写真に強い関心を抱く。また学寮長リデル一家がオックスフォードに移って来た年でもある。6 月 22 日の日記「シェイクスピアの『ヘンリー八世』を見てキャサリン王妃の見る夢のシーンに心打たれた。」<sup>3</sup>に見られるような芝居との出会いもあった。1856 年はカメラを購入し、詩や散文の投稿をさかんに行い、ルイス・キャロルというペンネームを初めて使用した年である。

第四期は 1867 年に始まる。ロシア旅行や、「ブルーノの復讐」を『ジュディーおばさんの雑誌』に発表した年で、この前後は美術館や劇場を頻

繁におとずれた時期である。1868年6月21日には父親の急死もあった。それに伴い家族のクロフト牧師館からギルフォードのチェスナッツ邸への移転をはじめ、家長としての重責をになって多くの時間を家族のために費やさねばならなかった。1870年はソールズベリー卿がオックスフォード大学総長に就任し、その後卿とその家族との出会いが彼にとって大きな意味を持つようになる。ソールズベリー卿は、当時のドジスンにとって父親を亡くした喪失感を埋めてくれる特別な存在だったようである。

第五期は1880年に始まる。7月、彼は突然写真を止めている。また母親亡きあとと家族とともに暮らしてきたルーシー叔母の9月4日の死や9月15日、アリス・リデルがR. ハーグリーブズと結婚した年である。1881年には数学講師職を辞退し、以後は教授およびコモンルームのメンバーとしてのみ大学にかかわる。大学問題や選挙法などに関する政治的あるいは行政的手腕を発揮した寄稿やパンフレットを多く発表した。1882年英国で心靈協会(The Society for Psychical Research)が設立されると、翌83年に入会し以後ずっと会員として関心を寄せ続けた。

第六期は1893年から死までである。1893年『シルヴィーとブルーノ』続編を出版したあとはひとすじに論理学へと向かってゆく。

以下、ここでは第三期は写真を、第四期は「ブルーノの復讐」とソールズベリー卿を、第五期はスピリチュアリズムと健康を、それぞれキーワードにして『シルヴィーとブルーノ』の成り立ちを述べてゆく。

## II. 第三期 写真

ドジスンの写真への関心はかなり早く、1851年ロンドンで開催された第一回万国博覧会にさかのぼる。そこでは大規模な写真展も併設されており、当時まだ数少なかったアマチュア写真家の注目を集めていた。5月1日に始まった同博覧会を7月に訪れたドジスは、その時の印象を姉のエリザベス宛の手紙に「……まるでおとぎの国に入ったようだ。十メートルもあるガラス製の噴水がとても見事だ。巨大な彫刻が並んでいるが、アマゾンと虎の彫刻が素晴らしい。アマゾンに乗せている馬の顔がとてもよく、まるで叫びが聞こえるようだ。蛇に襲われた子どもと彼

を助けようとしている犬の彫刻も見応えがある。ゴドフリー・ドゥ・ブイヨンの馬の彫像は象よりも大きい。すべて並外れていて、どんなに頑張ってみても百分の一も説明しきれない」と伝えている。万博の会場ハイドパークは「スケフィントン叔父の家から歩いて10分で行ける」とも書いている。万博では写真の情報交換がなされ、それを契機に写真の学会も発足し、アマチュア写真家が増えはじめ、1855年2月ごろまでには、ダゲールやタルボットらの特許権のしめつけもなくなり写真術は急速に進歩し広まってゆく。

その頃指導的な立場にいた写真家のひとりが、オスカー・ギュスターヴ・レイランダーであった。彼はローマで絵画を学び、イギリスにわたり肖像画家になる。1853年絵画に役立てようと写真術を学び、1855年にはウルヴァーハンプトンに肖像写真のスタジオを持ったのち1860年にロンドンに移り、当時まだ新しい職業だった画家写真家の第一人者となった。レイランダーは物語性のある合成写真を多く発表しており、ドジスは幼い子どもを撮った彼の作品に魅了され、それらを収集していた。日記の中でドジスは数回にわたりレイランダーについて書いている。その一つ1867年5月11日の日記はドジスの旺盛な好奇心が窺える。

ロンドンまで出かける。ウィルフレッドとロイヤル・アカデミーへ。いい絵がたくさんあった。フレデリック・グッドールの「レベッカ」、レイトンの「パストラル」、写真かと思まごうレイランダーの「オスカー」の頭部、ヘンリー・ネルソン・オニールの「ルターの生涯のある事件」、「さあおいで！ は嫌」というW・クロフォードのベッドにすわる子どもの絵、レイトンの優雅な「おはじきで遊ぶ子」、ノエル・ペイトンの「妖精の不意の侵入」は妖精の群が神隠しの子をさらって森に入っていくところで全体にエルフやノームなど妖精で一杯の絵、ヘイラーの「舞踏会からかえったリリー」も美しい、ワッツのドクター・スタンレーの肖像画は、薄暗くみじめな作品だと思った。一番の珠玉はミレーの「目覚め」だ。

午後アマチュア劇をみにアデルフィ劇場へ……「ボックスとコックス」が終わったところで、私はテリー家の人たちに会いに行った。彼等はステージボックスにいた。テリー夫人、ケイト嬢、ワッツ夫人、ポリーとフロア、テイラー氏とアーサー・ルイス（テリー嬢の婚約者）もいて紹介された。「狼の

皮をかぶった羊」(風刺雑誌「パンチ」のスタッフが総出で演じるトム・テイラー作的一幕ものの家庭劇)を見た。テリー嬢もワッツ夫人もフローもみんな以前と変わらない。トム・テイラーは元気だが、少しなれなれしすぎた。マーク・レモンは第一級。ベルナンドもいい。テニエルは神経質でせりふが殆ど聞き取れなかった。テリー嬢は時に感傷的すぎてポリーが思わず泣き出してしまった。

……コー氏のところに立ち寄った。「暁の雲」には独白を入れたらいいだろう、「アリス」は狂詩劇に出来そうだがむしろパントマイムに向いている、などと忠告してくれた。(日記, p.258)

ドジスは1863年、レンズをみがいているポーズでレイランダーに写真を撮ってもらっている。

1855年9月10日のドジスの日記によると、彼はクロフトを訪れていたスケフィントン叔父(ドジスにカメラの手ほどきをした人物)やウィリアム叔父とリッチモンドへ写真撮影に行っている。その時に見た現像のプロセスに驚嘆したドジスは、9月18日に「驚異的な写真術」という一文を書いて、フランク・スメドレー(親戚の詩人メネラ・スメドレーの母親で小説家。彼に書くことをすすめ、雑誌「コミック・タイムズ」の編集者に彼を紹介した人)に送った。それは11月3日発行のNo. 13に載り、あとでドジスはそれを家庭回覧雑誌「ミッシュユマッシュ」に切り張りしている。写真に関するドジスの著作はほかに写真家の苦労と悲哀をロングフェローの同名の詩のパロディーで描写した「ハイアウォサの写真撮影」(1857)、キマイラという機械を持った芸術家と、背も気位も高い女が登場する「淑女の物語——スコットランドの伝説の一部」(1899年甥のコリングウッドによって『ルイス・キャロル・ピクチャーブック』の中で初めて紹介された)、アメリアという名にひかれ、丘の上で彼女の写真を撮るのに悪戦苦闘する日記体で書かれた「写真家の外出」(1860)などがある。これらはいずれも写真に興味を持つ青年ドジスのイマジネーションと、日進月歩のただ中であつた当時の写真技術に対する写真マニアの熱気が手に取るように伝わってくるものである。なかでも「驚異的な写真術」は最初に書かれたもので、彼がまだカメラを購入する前の作品である。それだけに写真技術の操作に目を見張り、写真技

術そのものをテーマにしている点で、写真家の苦労をテーマにした他の三つを凌いでいると思われるので一部を省略して引用する。

### 「驚異的な写真術」(1855)

最近の驚くべき発明のおかげで、写真が精神の操作に適用されるようになり、小説を書くという芸術もたんなる機械操作の労働となりさがってしまった。私はさる写真家の実験に立ち会う許可をもらった。しかしその発明はまだ公表されておらず、化学薬品や操作についての詳細はすべて省略して結果だけを述べさせてもらおう。……どんなに低い知能が生み出した観念も、正しく調整された感光紙にのせれば、どんなふうにも〈発達〉させることが出来る。

虚弱な若者がよばれ、若者の精神と対物レンズ間における催眠術的交感関係がきめられた。操作が開始され、感光紙が一定時間露光され、取り外された。判読すると、

ある夜、馬に乗った上品な若者が胸にわだかまる悔恨の念をつぶやいた。

ああ、彼女は私の願いを決して聞こうとしない、  
けれど髪をかきむしるのはむこうみずというもの。  
乱れれば、わが美しさも損なわれるのだから。

彼女は愚かだ、盲目といってもよい、  
かつてあれほど愛情深かったのに、  
事情が何であれ心変わりするとは。

そして一瞬の沈黙。馬は石につまずき乗り手をふるい落とす。……  
若者の、左肩の擦り傷と乱れたスカーフだけが事故の名残だった。

「明らかに感傷派ですね」と「私」が言うと「はい、現状ではこの物語は売り物になりません。けれども次の段階に発展させれば、力強い闊達な流派の作品になります。」といって写真家はその感光紙をいろいろな酸性溶液に漬け、もう一度私に見せた。

夜、一人の紳士が乗馬道をやってきた。……頭の中で韻を整えてから口ずさんだ。

やれやれ、私の求婚はむだだった、  
ひどい奴と一緒になればいいさ、

「ノー」と答える彼女は愚か者だ。

勝手にするがいい、  
望まれたってごめんだと言ってやった、  
ほかにも大勢いることだし。

その時足をとられて馬が転んだ。乗り手は肋骨を二本折り、この不幸な日を忘れるのにかなりの時間を要した。

次は最高の段階になるように頼むと、写真家は「痙攣派 (Spasmodic) ないしドイツ派 (German School) だ」と言った。

はげしい嵐の夜…… 甲冑に身を固めた馬上の騎手は突進した。……たぎる感情を狂ったようにまくしたてながら。

たいまつよ、短剣よ、希望は去りぬ。  
二度死ぬるまで打ち碎け。  
我が脳髄は火、我が心は鉛。

女の魂は火打ち石、して我やいかに。  
女の容赦なき瞳に灼かれ、  
我が運命は無に果つる。

一瞬の空白。底知れぬ奈落。……突進——閃光——轟き——万事休す。三滴の血、二本の歯、鎧だけが騎手の最後を物語った。

この芸術の搖籃期にあたり、この発明に関してコメントは差し控えたい。ただし、人間の魂は科学の力を付加された途方もないものを熟視するとき目眩をもよおすものである。

さらに写真家は小さな実験をした。ワーズワースの詩の一節を、力強く立派な詩に磨き上げる操作だった。私が、バイロンの詩にも同じ操作をしてほしいと頼むと、感光紙は火のような形容詞ですっかり焼けただけ、火膨れして出てきたのであった。

最後に一言つけ加えると、この技術は果たして議会の演説にも適用出来るだろうか。……私はひそかに希望を抱き続けている。

「写真が精神の操作に適用されるようになり、小説を書くという芸術も単なる機械操作の労働となりさがってしまった」や「人間の魂は科学の

力を付加された途方もないものを熟視するとき目眩をもよおす」など、ダーウィンの『進化論』（1859）以前にあって、人間の精神と科学の進歩の乖離を見すえた23歳の大胆な見解に驚かされる。

その一方でドジスは自分が進む道をここで予告しているかのようである。期せずして展望を語り、将来の手の内を語っている。先に「ルイス・キャロルの家庭回覧雑誌」でも述べたが、「芸術は棒馬にはじまる」といったE.H. ゴンブリッチの言葉をここでもまた思い出す。ドジスにとって三脚つきカメラはまさしく棒馬だったのかもしれない。写真技術を文学に応用しようとするドジスの手法はその後多くの作品を生み出してゆくことになる。次にその第一歩となった彼のイメージを画像で見よう。

先にあげた『ヘンリー八世』のキャサリン王妃の夢の場面を描いた絵がある（図1）。「生涯忘れられない芝居体験」と1855年6月22日の日記に書いたその場面は、その後彼が好んで「眠っている」子どもの写真に応用した構図である（図2）。これらを見ると1889年になってドジスがレイアウトをした『幼な子のアリス』の表紙のためにガートルード・トムスンが描いた絵の構図（図3）とよく似ていることに気付く。

図1



図2



このようにしてみると、ドジスがこの表紙にいかに複雑な次元を意図していたかが容易にわかる。

1856年1月16日の日記には「ロンドン写真協会の年次展示会に出席。レイク・プラスの『ロンドン塔内の情景』という歴史写真は、合成写真を作成するヒントを与えてくれる」とある。2月9日の日記には、「……

図3

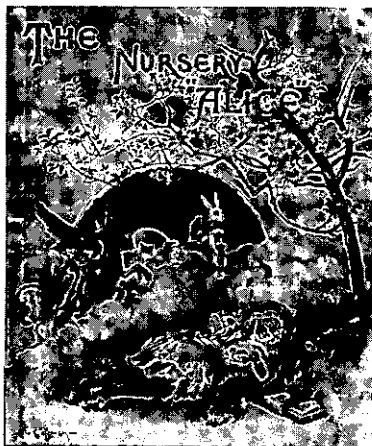


図4



われわれが夢を見ていて、それと気づきながら目を覚まそうとすると、目覚めているときなら狂っているとしか言いようのないことを言ったり、したりすることがないだろうか。だとすれば狂気を、夢と現実を区別できなくなった状態と定義してはいけないだろうか。非現実的だとは感じない夢を見ることもある。“眠りは一つの世界を持っている”のであり、それは現実と似た一面さえ持っているようだ。」とあるがこれは彼なりの夢の分析であり、これこそ彼が二冊の『アリス』や『シルヴィーとブルーノ』でねらった世界であろう。

3月18日彼は大学の同僚で写真では先輩格のレジナルド・サウジー(1835～99)とロンドンのオットウィル商会でカメラ一式を購入した。「カメラとレンズだけで15ポンドもした」と日記に書いている。

1858年(あるいは59年。1858年～1862年までのドジスの日記が見つかからないため、この間は年月日時の特定出来ないものが多い)には、レジナルド・サウジーを人間と猿の骸骨の脇に立たせたポーズで写真に収めている(図4)。これがダーウィンの新著発表の前か後か気になるが、この時期の写真としてはきわめて奇抜な構図である。

1862年10月9日の日記には、「アリス・ジェイン・ドンキンが寝室から身を乗り出し縄ばしごをつかんでいる「駆け落ち」という題の合成写



図 5

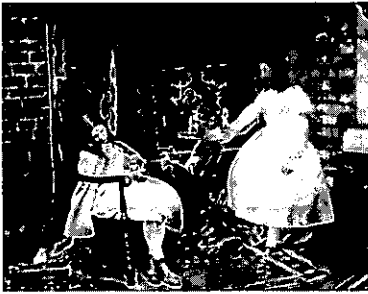
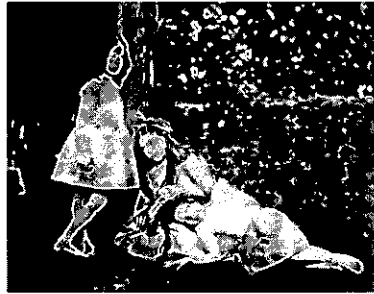


図 6



真を撮った。」とある。

1863年7月日記に「幽霊写真に挑戦したが、うまくいかない。」と書いているが、同じ年に「夢」という題でバリ一家の子ども達をモデルに複雑な合成写真を撮っている(図5)。夢の中の感じを出すために二重露光にし、エッシャーのだまし絵のような手の込んだ錯視の仕掛けを試みている。

1865年に撮影した「ディンフィナとメアリーそしてケティー(あるいはベルタ?)・エリス」という三人の少女の写真は、のちに『シルヴィーとブルーノ』で描きわけた、目覚めている状態、まどろんでいる状態、夢を見ている状態の三つを、まるで一人の少女の連続写真のように写したものと見ることが出来る(図6)。一瞬を捉えるカメラを通してドジスは写真空間に被写体の持つ流動的な内面(時間)を捉えようとした。

このようにして、ドジスは彼が『シルヴィーとブルーノ』正編序文で使った造語でいう文学散乱物(litteratureつまりlitterとliteratureのかばん語)をためていった。それら文学と科学を包み込んだ彼の思考の挿し絵は、彼が写真をアルバムに収めたように彼の思考のファイルに収集されてゆく。ドジスの作品を語る場合、一次資料の中には写真も含まれてしかるべきである。

### III. 第四期 「ブルーノの復讐」およびソールズベリー卿

『シルヴィーとブルーノ』正、続編はそもそも 1867 年「ジュディーおばさんの雑誌」のために書いた「ブルーノの復讐」が発端になっていることは、正編序文にも書かれているのでよく知られている。

長い物語にまとめたいと思ったのはたしか 1874 年……本は出来上がると直線的にみえるので、一気に書き下ろしたように見られがちだが、この物語はそうではない。文学散乱物がたまっているのだから、一本のより糸でそれらをつないでゆけばいいのだが……あらゆる文学に於いて一番難しいのは、独創的なものを書くことだ……『不思議の国のアリス』が世に出て以来同一のパターンの物語が次々に出現したので、『シルヴィーとブルーノ』では新しい道を打ち出そうと勤めた。子ども達に、幼ない日の無邪気な遊びのひとつときに相応しい思いつきを提供してみたかった……この物語で私がとった新しいやりかた——子ども達が喜びそうなナンセンスとともに、人生における厳粛な思考(人生の影の部分、悪夢、死など)を導入したこと——を誰かに詫げる必要があるとすれば、それは楽しみやくつろぎの時間にはそうした思考を完全に遠ざける「術」を身につけてしまった人々にたいしてである。

と、この作品に対する彼の意図を表明した。

1867 年ドジスは、『鏡の国のアリス』の挿し絵画家を探す目的もかねて美術館や劇場を頻繁におとずれていた。1 月 24 日には G.マクドナルドの子ども達をつれてヘイマーケットで「The Living Miniature」(「本物のような肖像」という芝居を観た。そのなかに「シルヴィウス」という笑劇があり、子役の演技に感心している。劇場支配人コー氏に招待されて 3 月 2 日の楽日にふたたび訪れ、支配人を介して舞台の仕掛けをみたり、子役達とじかに接する機会を持った。そのことが彼のインスピレーションを刺激して、「シルヴィー」のヒントになったのではないだろうか。6 月 24 日の日記には「(フランス語教師の) ビュエのところフランス語の四回目のレッスンを受けに行く。パリの万国博覧会に行きたいと思っている。午前 2 時になったが、ギャティー夫人にたのまれた『ブルーノの復讐』という話を書いている」とある。

7 月 11 日の日記には「パスポート到着……同僚のリドンとモスクワ旅

行にゆくことを決めた。」という記述があり、12日にはオックスフォードを発っている。(7月13日から9月13日までの二ヶ月にわたってベルギー、ドイツ、ロシア、ポーランド、ドイツをまわり、9月6日から13日までをパリの万国博覧会見学にあてている。)

旅行中フランスの景観の美しさに感嘆した彼は9月8日の日記に「パリの人々がロンドンを悲しい街と呼ぶのもわかる」と記している。9月9日の日記には、「万博の絵画彫刻展をみたが、フィレンツェのカローニの「ライオンと遊ぶ子ども」や「オフィリア」などの大理石像が美しい。……フランス絵画はすばらしい。イギリスの芸術家たちは互いに牽制しあって二流の絵を出品したのではないかと思った。」などと記している。この「ライオンと遊ぶ子ども」は『シルヴィーとブルーノ』正編8章の「ライオンに乗って」や13章の「ドッグランド訪問」、続編4章「犬の王」や14章「ブルーノのピクニック」などのイメージと容易に結びつく。万博見学のほかパリでは写真を買ったり、芝居を見たり、薬を求めに僧院に行ったりしたことが日記に見られる。

10月22日の日記には「ジュディーおばさんの雑誌」に妖精物語「ブルーノの復讐」を送った、とありそれは12月1日発行の同雑誌にF.ギルバートの口絵とともに掲載された。この「ブルーノの復讐」は、現在『シルヴィーとブルーノ』正編の第15章で見る「ブルーノの復讐」とは内容が異なっている。オリジナル版と同じ「ブルーノの復讐」は現在、Jack Zipes 編の *Victorian Fairy Tale*, (Routledge, 1987, pp.75-87, または R. L. Green 編の *Modern Fairy Stories*, Dent, 1955) の中に見ることが出来る。

ザイプス編の本によると、もともとの話は現在の正編14章の「妖精シルヴィー」と15章の「ブルーノの復讐」をほぼ合わせたもので、出だしは現在の14章の最初45行 (Nonesuch 版による行数) を除いたところ、  
“It was a very hot afternoon——too hot to go for a walk or do anything——or else it wouldn't have happened, I believe.” から始まって、現在のものと同じように妖精に出会う条件を話したあと、現在は無い次の部分

The one I'm going to tell you about was a real, naughty little fairy.

Properly speaking, there were two of them, and one was naughty and one was good; but perhaps you would have found that out for yourself.

Now we really are going to begin the story.

It was Tuesday afternoon, about half past three — it's always best to be particular as to dates — and I had wandered down into the wood by the lake, partly because I had nothing to do, and that seemed to be a good place to do it in, and partly (as I said at first) because it was too hot to be comfortable anywhere, except under trees.

が挿入されている。両者の違いで一番目を引くところは、コーヒーカップに入る位の妖精の男の子に出会って“*What's your name, my little boy?*”と「わたし」がたずね、その子に“*What's yours?*”とやりかえされた時、「わたし」が“*My name's Lewis Carroll,*”と答えているところである。現在のものではそこは“*I told him my name quite gently.*”と間接的になっている。ほかは小さな違いにとどまっており、ザイプス編ではブルーノが死んだ鼠に座っているファーンイスの挿し絵が一つついた13ページの「いたずらっ子とよい子の二人の妖精話」になっている。

「ジュディーおばさんの雑誌」掲載時に付けられたF. ギルバートによる口絵についてドジスは、1886年3月7日『シルヴィーとブルーノ』の挿し絵画家に決まっていたH. ファーンイスに、“*I don't like Gilbert's illustration. They both look grown-up, and something like a blacksmith and a ballet-dancer.*”<sup>10</sup>と手紙を書いている。ギルバートの絵と似た構図でシルヴィーとブルーノを描いたヘンリー・ホリデー（『スナーク狩り』の挿し絵を描いた画家）による挿し絵がS.D. コリングウッドの『ルイス・キャロルの伝記』の256ページに見られるが、これもドジスは好まなかった。ドジス自筆の「ブルーノの復讐」のためのスケッチもある。ジョン・パドニーは『ルイス・キャロルとその世界』のなかで、その自筆の絵を「1867年12月『ジュディー叔母さんの雑誌』に掲載された時のキャロル自身によるスケッチ」と説明しているが、実際はそうではなかったようだ。同雑誌の編集者ギャティー夫人は、美しく、ファンタスティックで無邪気ないい作品を自分の雑誌に載せることが出来て光栄だ、とドジスにお礼の手紙を送り、さらにその中で、「数学の才能以

外の才能もたっぷりお持ちだから、是非もっと長い物語にしてみてもいいかがでしょう。イギリスではあなただけが持っておられる独特の才能ですから。」と、さらにふくらませて長編に仕上げるよう進めている。しかしドジスはすぐには書かなかった。

12月31日の日記に「辛いことの少ない恵まれた年だった。」と書いていたのだが、翌1868年6月21日に父親が急死する。ドジスはのちにその日のことを「生涯最大の痛恨事」と友人に語っている。クロフトの牧師館を立ち退かねばならず、その後の6週間をクロフトに滞在し、家さがしに奔走する。9月10日の日記に「ギルフォードのチェスナッツ邸の契約のため弁護士のウエインライトにあう」とあり、11月1日の日記には「ファニー、キャロライン、ヘンリエッタ、ルーシー叔母がチェスナッツ邸に引っ越したので私も二、三度行ってみた。あとの人たちも今週中には移る予定。スケフィントンも落ち着いたようだ。彼はチャートシー教区のトリル氏のもとで牧師補になった。今週土曜から任務を始めるそうだ。エドウィンは郵政省貯金局の競争試験の準備。私は（大学内の）新しい部屋に引っ越しを終えたところだ。」と記しており、家族に目配りをする家長の責任を背負った彼の様子が伝わってくる。

1870年、第三代セシル侯で保守党党首、のちに英国首相となるソールズベリー卿（Robert Arther Talbot Cecil, 1830-1903）がオックスフォード大学の新しい総長になった。ドジスも保守党支持者であった。6月22日にソールズベリー卿の就任式があり、6月25日の日記には、

リドンのD.C.L.（教会法の法学博士号）の授与式があった。総長は素晴らしい演説をした。……幸運にもリドンの仲立ちでソールズベリー卿の子ども達の写真を撮らせてもらえることになった。リドンはソールズベリー卿夫人に話してくれ、オールソウルズ・カレッジにくるようにという夫人からのメッセージを持ってきてくれた。私が訪ねると、レイトン夫人が私をソールズベリー卿夫人に、ウインチェスター司教がマーガレット・ボーモント候夫人に紹介してくれた。私が歓待されたのは、『不思議の国のアリス』の作者であることと大いに関係がある。次の日ソールズベリー卿一行が見え、卿一人の写真と、卿と汽車の車掌の衣裳を着た二人の男の子の写真を撮った。午後卿は街に出かけたが、夫人と子ども達が私の部屋を再び訪ねてくれたので、アルバムや『鏡の国のアリス』（このころリドンの助言によりタイトルが決定した

ばかりだった)のテニエルによる最初の七枚の挿し絵などを見せた。間もなく夫人が呼ばれ、子ども達をおいて出て行かれたので、二人のお嬢さんの写真ときょうだい四人一緒の写真撮った。とてもくつろいだ感じのいい家族で子ども達も愛らしい。

ここに登場する子ども達は後の四代目セシル侯爵になるジェイムズ、ウィリアム、12才のモード、9才のグエンドレンの四人である。L.R. グリーンはこの日の日記の注(p.288)で女の子二人を入れ違えている。同家はのちに男の子が三人ふえ七人きょうだいになる。グエンドレンはドジスンにとって「シルヴィー」のイメージモデルだったらしい。(彼女はのちに父親の秘書をつとめ、父の死後彼の伝記を書いた)。同じ日の日記に「今朝はリデル夫人がイーナとアリスの写真撮るために二人を連れてやって来た。」とも記している。ドジスンにとって写真と作家としての名声が上流社会へのパスポートの役割を果たしていた。彼は以後しばしばロンドンやオックスフォード、そしてハットフィールドでソールズベリー卿一家の客となる。

1871年7月1日の日記には、初めてハットフィールドハウスを訪れるため「キングズ・クロスから深夜の汽車に乗る。ハットフィールド駅に迎える馬車が待っていた。数分で屋敷に到着。」という記述が見られ、翌2日には「日曜日、雨。チャペルで礼拝。一日家を案内してもらおう。本当に感じのいい一家だ。彼等は親切を絵に描いたような人たちで、心からくつろげる」。7月3日の日記によると、その日はグエンドレンの誕生日で午前中子ども達の写真を撮り、午後葡萄園へピクニックに出かけている。夜はダンス。写真や『鏡の国』の挿し絵を披露している。7月4日の日記には、「卿は午前十時の汽車で子ども達と一緒にロンドンへ発った。私は11時45分の汽車まで館に滞在した。朝食のあと夫人に図書室やクイーンズ・ルームを案内してもらった。そこにあったエリアの巡礼のタピストリーを写生した。そのあと夫人と一緒にロンドンへ戻った。今までで最高に楽しい滞在だった」と記している。5日の日記には「ロンドンでモードとギニーをつれてロイヤル・アカデミーへ行った」とある。1871年の冬にはハットフィールドでの新年のお祝いに招かれたが、彼が風邪を引いたため行けなかった。

1872年6月29日の日記には「ハットフィールドの教会堂の再建式に招かれる。」7月2日「明日がグエンドレンの誕生日なのでともに過ごす。リドンも一緒だ。」とあり、7月3日「ウォルサムクロスと寺院まで遠出。一行はソールズベリー卿夫人、オルダソン夫人、リドン、アンブローズ夫人、モードとギニーと私。午後は去年と同じく葡萄園へ。夜は花火を楽しみのちパズルで遊んだ。」とある。1872年12月31日の日記には「朝六時ハットフィールド着。ハットフィールドハウスのギャラリーで大勢が“チャンスは法を売る(Chance-sell-lawつまり Chancellorのもじり劇)”という幽霊がたくさん登場するシャレードを見ていた。ジェスチャーはあまりうまいとは思えなかった。そのあと子ども達に妖精物語、鍛冶屋や小鬼がでてくるロシアの昔話をした。明けて73年1月1日は、セント・オールバンズ寺院まで出かけ、ソールズベリー卿とユースタス・セシル卿と一緒に5マイルを歩いて戻っている。夕方百人以上の子ども達がやってきて、ダンスや手品を楽しむ。2日の日記には「ギャラリーで『シルヴィーとブルーノ』の新しい話を子ども達に話した。火曜日(31日)からずっと続けてストーリーテリングをしている。忘れないように書いておかなくてはならない。午後ロンドンに出て“もの言わぬ女”と“シンデレラ”の芝居を見、キングズ・クロスで夕食をとり、デザートはハットフィールドの席に加わった」。3日の日記には「一同お話にたいする飽くなき興味を示す。幸運にも『シルヴィーとブルーノ』の二、三の挿話を思いついた。約一時間かかった。ロンドンへ行き“スキャンダルの学校”と“靴二つさん”をみた。後者の子役ケティー・ローガンが見事だった。」(日記 p.316)。この時の滞在は続編序文で、「続編最後の部分は1873年と書き込みのある草稿から取った……この作品は20年がかりということになる」と特記しているところと重なる。

1874年12月31日の日記には、「濃い霧の中ハットフィールドへ。今までで一番寒い。40人ぐらいの客が舞踏会を楽しんでいた。いい光景だ。1874年という年が楽しいハットフィールドハウスで暮れてゆく」とある。1875年1月1日には、ハットフィールドハウスで集まっていた子ども達に「鍛冶屋と小鬼」と「アガッグ王子」の話長くしたもの話している。午後は葡萄園にゆき、途中コックス氏やスライゴー卿と心靈思想(スピリチュアリズム)について話している。2日は「またお話のつ

づきをした。そろそろお話役をおやすみにしたい。」と書いている。12月30日の日記は「ハットフィールドへ。いつもと同じだが、ジョン・マナーズ夫妻と可愛いお嬢ちゃんが新しいお客に加わっていた。わらべうたにあわせて踊るカドリールが美しかった。31日「いつものように朝のお話をした。期待されるので気が重い。午後ソールズベリー卿と六マイルの散歩。150人も子ども達が集まった。」1876年1月1日「11時25分でロンドンへ。」このあと数年間ドジスはハットフィールドハウスでの暮れと新年を祝う会に顔を出していない。

1876年11月25日ドジスはマクミラン社のクレイク宛てに「……私から書く力が衰えないうちに是非もう一冊子どもの本を書きたいと思っています……画家に目配りをお願いします。テニエルに匹敵するような画家がいたら知らせて下さい。」と手紙を書いている。<sup>13</sup>

1877年9月12日の日記に「ブレイクモア家にお別れの挨拶に行き、ドリーに『小さい狐』の話をした」とある。この話のはちに『シルヴィーとブルーノ』続編の15章になった。

1877年11月27日の日記には「ウォルター・クレインに『ブルーノの復讐』と詩集『ファンタズマゴリア』のために挿し絵を描いてほしいと手紙を書いたが、クレインは話が面白くないし、自分の絵はテニエルのような線画ではなく輪郭が太いのでむいてない、と断ってきた。」とある。

1878年4月2日の日記によるとドジスは、サンボーン（『ラング・クーティーン』の挿し絵画家）、W.クレイン、アーサー・フロスト（アメリカの挿し絵画家で『三つの声』のち『詩？ 理性？』に挿し絵を描いた。『アンクル・リーマス』の挿し絵画家として有名）の三人の画家を考えていたようである。

1879年6月27日の日記には、サウスケンジントン・ミュージアムで初めて画家のガートルード・トムソンに会ったことが記されている。この年一月から手紙のやり取りをしており、当日会う約束はしていたが会うのは初めてだった。のちにトムソンはこのときの様子を次のように回想している。

一人の紳士が二人の子どもの手をつないで入ってきました。私はルイス・



キャロルだとすぐわかりました。彼は身をかがめ一人の子どもに何かをつぶやくと、その子は一瞬ためらって、私を指さしました。彼が近づいて自己紹介したので、どうして私がわかったのかを訊ねると、妖精を知っている若いご婦人に会うのだと言ったら、子どもが教えてくれました。私にはその前から分かっていましたよ、と言いました。」(日記 p.380)

以後トムソンはモデルをつれてオックスフォードにやってきましたりドジスンがロンドンの彼女のアトリエを訪れたりしている。トムソンは彼に絵の手ほどきもした。ドジスンは彼女の絵がとても気に入り、のちに『幼子のアリス』の表紙や『落日三たび』の挿し絵をたのんでいる。

以上みてきたように70年代はソールズベリー卿と出会ったことで、大学での公的なつきあいにも増して卿一家との、特に子ども達との私的な交流を保ちながら、ハットフィールドハウスに集まったほかの子ども達も含めて話をする機会が重なり、新しい物語のイメージをふくらませるのに役立った。ソールズベリー卿の館での子ども達に囲まれた暖かな楽しい雰囲気は、父親を亡くしたばかりのドジスンにとって特別の思いを抱かせたようである。先にも述べたようにドジスンはソールズベリー卿に父親に代わる者の像を重ねていたのではないか。同じ1868年に父親を亡くした者同士(ソールズベリー卿も68年に父親を亡くし、第三代のセシル侯爵になって間もなかった)の喪失感が親和をもたらしただのかもしれない。ハットフィールドの屋敷、庭園、風光などにひたるうちに、ドジスンはしだいに癒されると同時にイマジネーションを刺激されていった。日記によると1887年ドジスンは一時『シルヴィーとブルーノ』の題を「四季」としていたが、ハットフィールドハウスの甲冑のコレクションと並んで現在も飾られている17世紀初頭ウオリックシャーのラルフ・シェルダンによる大きなタピストリーは「四季」という題の四枚つづきのものである。一時的とはいえ大いに影響があったであろう。また屋敷の大階段をのぼった踊り場の手すりに彫られた熊手と箆を手にした庭師の木彫は、国王チャールズ一世と初代ロバート・セシル侯の庭師で、フランス王室を訪ねて園芸をマスターし珍しい植物をハットフィールドの庭園に移植したジョン・トレーディスキャントを記念したものである。この庭師が『シルヴィーとブルーノ』全体に活気を与えているあのノン

センス詩を歌う狂った庭師と結びつくのも当然である。ソールズベリー卿一家をめぐる世界に同化することで新たな活力を得て、その力を抛り所にドジスは再び子どもの本を書く意欲を固めていったようである。そのため、子ども時代の無邪気な遊びにふさわしいノンセンスと、人生の影の部分とを擦り合わせる工夫をした。その根本に彼のスピリチュアリズムへの強い関心があったと考えられる。

#### IV. 第五期 スピリチュアリズムと健康

ドジスの心靈思想(スピリチュアリズム)への関心は『シルヴィーとブルーノ』を書くうえで重要な要因になっていた。様々の合成写真や仕掛け写真、先にみた1856年2月9日の日記の「眠りは一つの世界を持っている」などにもそれが現れている。彼には夢や眠りという現象を人間の心に寄り添わせて説明出来るのではないかと、いう強い思いがあった。彼が本格的にスピリチュアリズムに関心をいだき始めたのは1880年頃のことと言われている。1882年に創設された英国心靈協会にその翌年入会し、終生会員として関心を持ち続けた。彼は超自然的なものは存在するという確信をもっていた。スピリチュアリズムやオカルティズムに関連する彼の蔵書には

Daniel Dunglas Home: *Lights and Shadows of Spiritualism* 『スピリチュアリズムの光と影』

Vernon Lee: *Other World* 『異界』

Alfred Wallace: *Miracles and Modern Spirituarism* 『奇跡と現代のスピリチュアリズム』

O. R. H. Thomson: *Philosophy of Magic, Christmas's Phantom World* 『魔法の哲学』、『クリスマス期の幽霊世界』

Frank Seafield: *Literature and Curiosities of Dreams* 『文学と夢』

Edward Clodd: *Myths and Dreams* 『神話と夢』

などがあった。<sup>14</sup>

1880年7月ドジスは突然写真を止めている。1880年7月15日の日

記に「午前は焼き付けをして過ごす。ガートルード・トムソンとゲリダ・ドラジェが三時にやってきて、彼女たちの写真を撮って二時間すごした。七時まで濃淡の調色と定着をした。」これが写真に関する最後の記述である。9月4日の日記に、1851年の母親の死後ずっと家族とともに母親代わりを勤めてきたドジスの母親の妹のルーシー叔母が亡くなったことが記され、臨終に間に合い、追悼の祈りを捧げ、その場に立ち会えたことを感謝する記述がみられる。9月15日にはアリス・リデルがR. ハーグリーブズと結婚したが、日記には書かれていない。叔母のお葬式がすむと彼はイーストボーンに向かっている。その後10月11日ロンドンに戻っているが、この間約一カ月彼は日記をつけていない。

『シルヴィーとブルーノ』の執筆に没頭すると間もなくドジスは自分の健康に不安を抱くようになる。その頃彼は健康のため一日20マイルの散歩を日課にした。1881年5月の日記には一日27マイル散歩をした記録がある。しかし彼は体力にみあう食事をとっていなかった。そんな頃、7月24日の日記には「『シルヴィーとブルーノ』がうまくいきますように……。」という祈るような記述が見られる。8月26日の日記には「ドッグショーにゆく。大きな白黒のニューファウンドランド犬が見事だった。」とありL.R. グリーンは、これが『シルヴィーとブルーノ』の13章に出てくる犬の王様のヒントになったのではないかと見る。ハットフィールドハウスでは当時「狩り」がさかんに行われ、客のための最高のもてなしになっていた。そのため同家には狩猟用の犬もたくさんおり、犬が階上に登らないよう階段に特製の木の柵がしつらえられていた。それは現在も見ることが出来る。10月18日の日記には生活様式を変えるため今年いっぱい数学講師職を辞職したい旨学寮長に通知した、とある。力が尽きる前に自分がやるべき仕事——数学教育のための本と子どもの無邪気な娯楽のための本——のために時間を活用したいと考えた。以後は講義なしの教授およびコモンルームの仕事で大学にかかわってゆく。公正な選挙への関心が強かった彼はクライスト・チャーチの選挙方式と投票制度を改革したいと思い、啓蒙のための小冊子を出版した。オックスフォード大学の学報「セント・ジェームズ・ガゼット」に総選挙について寄稿し、ソールズベリー卿に選挙法の改正を訴え、比例代表制の正当さを強く主張した。当時の英国の選挙制度の弊害を指摘し、「有権者

の意思が代表されない率が最も小さくなる」には選挙区定数の数に関わりなく（当時の二名連記ではなく）一名の場合であることを証明し、議会代表の原理を数学および論理学の立場から解いた。（この制度は1993年までの日本の中選挙区制の方式に近いものだったらしい）。若い頃は学寮の制度に批判や疑問をかくさなかったドジスンだったが、「オブザーヴァー」や「ガーディアン」がクライスト・チャーチ・カレッジを批判すると、カレッジを擁護する論評を積極的に発表した。ソールズベリー卿を補佐しようという意図も働いていたかもしれない。この時期彼がみせた多くの批判精神は執筆中の『シルヴィーとブルーノ』の中でも、教会の儀式偏重批判や狩りの風習批判などの形で登場人物に語らせている。11月23日の日記には、「枕頭問答を書く、『シルヴィーとブルーノ』の挿し絵は（アーサー）フロストに描いてもらいたいと思っている」と、依然として挿し絵画家がきまらない不安をのぞかせている。

1882年7月31日の日記には「イーストポーンに滞在、『シルヴィーとブルーノ』再出発を期す」のような記述がある。この年彼はフェローのコモンルームの主任に選ばれ、その後九年間社交室の管理、運営に努めることになる。1884年および1886年にはコモンルーム管理の悲哀と歓びについての冊子を出版した。

1884年1月1日の日記には「いつでもこの上なく楽しいあの訪問で一年が始まった。またハットフィールドに出かけた」とあり、中断していた訪問を再開している。ドジスは心から好感を抱いていたハットフィールドハウスやソールズベリー卿一家をとうして、英国の貴族の生活に触れ、彼等の人となりや生活のありようを大なり小なりかなりの部分『シルヴィーとブルーノ』の中に取り込んだ。手入れの行き届いた庭、その背後にいる庭師の存在、図書室、タバストリー、スモーキング・ルームなど、作品の舞台に取り入れられたものは数多い。特にノンセンス詩を歌う庭師の登場は、小説の間（ま）を活気づけるトリックスター役として、当時の読者の関心をこの作品に引きつけた唯一の要素になった。もともとドジスは、『シルヴィーとブルーノ』のかなりの挿話を、セシル家の子ども達やそこに集まる子ども達に話していたことは先にも触れた。

『アリス』の二作がそれぞれゴッドストウやニューナムといったオック

スフォードをややはずれた場所をトポスとして持っていたように、『シルヴィーとブルーノ』はハットフィールドをトポスにしている。作品では海辺の町エルヴェストン（不完全ながらドジスの夏の静養地イーストボーンのアナグラムの地名）になっており、ロンドンからそこに行くには途中フェイフィールド（ハットフィールドとの類似に注目）乗換駅を通る。正編の2章および5章の汽車の場面で語り手「わたし」は心臓を患っており、静養のため海辺の町にすむ友人で医者のアーサーを訪ねるところである。「わたし」は車中『心臓の諸疾患』を読んでいる。

アン・クラーク・アモーは『ルイス・キャロルの伝記』のなかで、1891年8月ドジスが「自分は心臓が弱いことを知っている」と書いて気にしていたことを示したうえで、彼が本当に心臓疾患があった証拠はないが、医学書を読み、知識を蓄えていたため自己診断をすることがあったこと、ヴィクトリア期の人々のあいだでは心臓疾患をロマンティックに捉えたがる奇妙な傾向があったことを指摘し、『シルヴィーとブルーノ』の語り手が心臓の病をもっていたことも故なきことではない、と説明している。<sup>15</sup>

1884年9月9日の日記には「覚え書き帳から『シルヴィーとブルーノ』を数ページ書く。」とある。9月22日の日記には、オルフリートン滞在中、W.H. ドレイパー牧師にかわって「心の栄養」(Feeding The Mind)という講演をしたこと、夜に悪寒をともなう間歇熱におそわれたことが記されている。「心の栄養」は、人間がとる食事、お茶、飲み物などが肉体に栄養を与えるとして、人は心にも栄養を意識して与えているだろうか？ 二つのうち身体のほうが大事だと言えるだろうか？ という問いかけではじまる。

By no means: but *life* depends on the body being fed, whereas we can continue to exist as animals (scarcely as men) though the mind be utterly starved and neglected. Therefore Nature provides that, in case of serious neglect of the body, such terrible consequences of discomfort and pain shall ensure, as will soon bring us back to a sense of our duty: and some of the functions necessary to life she does for us altogether, leaving us no choice in the matter.<sup>16</sup>

生命とは肉体にどれだけ栄養が与えられるかに依存しているものであり、それに対し心は全く栄養を与えられず無視されても、人は動物として生き続けられる。肉体がひどく無視される場合には、不快や苦痛などですぐに何かをしなくては、例えば食べなくては、と気付く。自然は生命に必要ないろいろな働きを有無をいわず人間に代わって、すっかりやってくれているのだ。

と言って、もし人が、食べ物の消化と循環の管理を自分の意志でやらなければならないとしたら、たいていはうまくゆかないだろう。「今朝心臓のネジを巻き忘れた。3時間も止まったままだ！」とか「今朝は散歩は無理だ。先週からずっと忙しかったので後回しにしていた 11 回分の消化をやらなければならない。医者はこれ以上放っておくと危ないと言った、ということにもなりかねない」と続け、心の栄養にも整理と注意が必要である、と説いている。これは今われわれが抱えている心の問題につながる場所である。

しかし彼自身の健康がすぐれず、このあと悪寒に悩まされている。そして彼は自分の健康と残された時間に思いをいたし、仕事が完成できないのではないかという強い不安に襲われるようになる。

1885 年 3 月 29 日の日記には、「いまだかつて手元にこんなに多くの著作上の課題をかかえたことはない」と記し、次のような 15 項目にわたる近刊や出版予定、構想などを列挙した。

- 1) 『ユークリッドと現代の好敵手たち』の補遺 (85 年 4 月刊行)。
- 2) 同書の第二版 (85 年 11 月刊行)。
- 3) 『枕頭問答集』、これは暗闇でも出来るように工夫した (93 年刊行)。
- 4) 『ユークリッド』第五巻。
- 5) 『等積法のための簡単な事実』。
- 6) 記号論理学 (第一部 96 年刊行)。
- 7) 『もつれっぱなし』 (85 年 12 月刊行)。
- 8) ガートルード・トムソンの挿し絵入りゲームとパズル集、‘記憶術’、‘暗号術’、手紙の登録法など。
- 9) 『幼な子のアリス』、そのための 20 枚の絵にテニエルが彩色中 (89 年刊行)。
- 10) 『ファンタズマゴリア』の中から真面目な詩だけを抜き出してファーニス氏に挿し絵を描いてもらい『詩? 理性?』という題の詩集にする (98 年死後『三つの落日』として刊行、挿し絵はガートルード・トムソン)。
- 11) ハーグリーブズ夫人から借りている『地底のアリスの冒険』のファクシミリ版。そのため彫り師のダルジェルと連絡を取っているところ (86 年刊行)。
- 12) 『少女のためのシェイクスピア』

ア』は「テンペスト」をやりかけたところ。13)「代議員選挙制度」の新版の体系的補遺。14)『ユークリッド』第一巻、第二巻の新版。15) ファーニスに挿し絵をたのんでいる新しい子どものための本。本の題は未定だが『シルヴィーとブルーノ』になるだろう。ほかに少年のための幾何学の本、わかりやすい神学に関するエッセイ、アリスの戯曲などなど。

そして「これぞ“大風呂敷”の見本だ」と最後に自嘲気味につけ加えている(日記 pp.433-434)。

こうしたドジスの過度のあせりや健康不安の裏に実際はどんな病歴があったのだろうか。そもそもの発端はラグビー校でかかった百日咳であり、その後遺症が二次的な気管支炎につながって、冬になると咳や悪寒になやまされるようになり気管支炎が慢性化していったようである。

1885年12月31日チェスナッツ邸滞在中、彼は医者が「てんかん」と診断した発作に苦しみ、その後長く頭痛と不快感に悩まされた。2回目の発作は1891年2月6日クライスト・チャーチで朝の礼拝中に起きた。(日記 p.482) その時の様子を友人に宛てて次のように書いている。

ある朝わたしは「なんて寝心地の悪い枕なんだろう!」と言いながら嫌な夢から覚めると、自分が礼拝堂の聖職者席の床に横たわっていたのです。はじめはまだ夢を見ているのではないかと思いましたが、しばらくするとそれが現実であることがわかりました。私は倒れた拍子に頭をうって鼻血を出し、血溜まりのなかにいたのです。(医者は骨ががたがたになっており、回復には数週間かかると言いました。) 私はほぼ一時間そこで横になっていたのです。

この二度の発作は、ドジスの甥が子どもの頃軽いてんかんの発作を起こしていたことから家系にその傾向があるかもしれないと彼を恐れさせた。後年彼はひどい頭痛に苦しむが、一般的なてんかんの症状は見られなかった。1890年10月31日の日記にはその日、悪寒、膀胱炎、腰痛に苦しんだことが記されている。『写真家ルイス・キャロル』(1949)を著したH. ガーンズハイムは、「人生が短くなり、夜の影がぼんやり立ち現れるとき、人はほんの楽しみのための時間も惜しむようになる。そうした時間のために、終わりがくるまえに片づけるのを望んでいた仕事を中

途のまま残すことになるのだ……私の心にしばしば思い浮かぶ句がある。「夜になり、誰も働くことが出来ない」(ヨハネ伝 9 : 4)<sup>18</sup>を引きあいに出している。1891年8月ドジスは「私は人生の年月をこれ以上あてにしようとは思わない。この前のてんかんの発作があまり簡単に起こったので、あるとき心臓(弱いのを知っている)が停止しあの世に行っていたかもしれないのだ」と書いている。若い頃から彼はホメオパシー(同種療法)に興味を持っていた。一時疑問を抱いたこともあったがのち再び友人のシャダム医師がギルフォードで同種療法の治療を始めてからは彼の治療を受けていた。ドジスは散歩を好んだが、歩き方はぎくしゃくしていたという。セルウィン・グッデイカーは骨関節症であったのではないかと見る。1891年冬にはそれが悪化して四ヶ月も寝込んだことがあった。1891年12月5日に「私の二度のてんかんの発作は冬に起きている。85年の時はロンドンの寒さが悪かったのだろう。」と書いている。ほかの病名としては、神経系統の問題、視力の変調、せっ腫(はれもの、boils)、湿疹(ecsema)、膀胱炎(cystitis)、滑膜炎(synoritis)、ホメオパシーの医者は脾臓疾患(spleen is out of order)と診断したこともあったという。

1886年10月3日の日記には「挿し絵はファーニスに決まった。シルヴィーの顔にいいモデル、ブルーノの顔にいいモデルをファーニスに手紙で知らせた。」とある。のちにファーニスが『風刺画家の告白』(1901)に書いた遠慮のない記述によると、「ドジスから大量のスケッチや何束もの役に立たぬ写真が送られ、私にわずかな線で彼の理想を具現するような顔を、三ペンス硬貨ほどのスペースに描かせようとした。一回の郵便で、さる若い貴婦人の全身像、あるいは半身像の写真が一束届いた。それは彼が自分のヒロインとして心に描いていたものらしかった」。しかしファーニスは結局自分の子どもをモデルにした。

1886年11月23日ドジスはマクミランに宛てて「お伝えしたかも知れませんが、もう一冊子ども向けの本を書いています。挿し絵はハリ・ファーニスが描いてくれています。その出版を引き受けていただけでしょうか?……原稿の焼失などを恐れ(二度と思い出せない)ので原稿ができた順に棒ゲラに組んでいただきたいと思います。クレイに頼むのはいつごろがいいでしょうか? ボリュームは二冊の『アリス』を合わ



せたくらいで、50 ないし 60 枚の挿し絵を入れるつもりです。」と手紙を書いた。<sup>19</sup>

この申し出にマクミラン社は喜んで引き受けるので原稿が出来次第活字にしよう、と返事している。

1886 年劇作家で評論家の H.S. クラークから『不思議の国のアリス』のオペレッタ化の話があり、同年 12 月 23 日、キャロルの少女友達フィービー・カーロ主演で初日をむかえ翌年 2 月に終演した。4 月の「シアター」誌にドジスはその思い出を寄せている。1888 年にはそのオペレッタはイーザ・ボウマン主演で再演された。

1887 年 8 月 12 日の日記には「新作に“四季 Four Seasons”と仮の題をつけた。初稿ゲラ出来上がる。」とある。四季という題はハットフィールドハウスにあるタピストリーと同じ題であることは先に述べた。9 月 27 日にはアリス役を演じていたイーザ・ボウマンに初めて会っている。『シルヴィーとブルーノ』正編にはダブル・アクロスティックでイーザ・ボウマンの名前を読み込んだ献詩が付けられている。10 月 24 日にはリッチー夫人（もとアン・イザベラ・サッカレー夫人）に次のような手紙を書いた。

……今の私は実に悠々自適の身で何の時間にも何の季節にも縛られてはいません(もっとも教授会や投票には行かなければなりません)。講師のほうも数年前に辞めました。体力のあるうちに自分の時間が欲しかったからです。自分がこれに向いていると感じる仕事があるものです。それこそ神から賜った使命なのだと思います。この夏はイーストボーンで 4 か月過ごし、一日のうち六時間を一冊の本にかかりきっていました。物語ですが、『アリス』よりはもう少し上の年齢の読者を念頭に置いたものです。完成はまだですが、1888 年のクリスマスには一部差し上げられそうです。私はあなたの短編集『五人の友達』をイーストボーンにもってゆき、文章を書きまえにそれを読みました。耳をいいリズムに保っておくためです。あなたの文体には驚嘆します。そういう文に浸っていると私の想像力が刺激され、文章がどんどん立ち上がってきます。<sup>20</sup>

1888 年 7 月 29 日の日記には「棒ゲラを切って、張り付ける作業をした。あるところは校正刷り、あるところは原稿のままなので、また印刷

屋を悩ませることになってしまった」とあり、8月4日の日記には「自分のためと、ファーニスのためと切り張り作業をした。このところ毎日書いている」。8月13日の日記には「芝居『真夏の夜の夢』みる」。8月20日の日記『お気に召すまま』みる」。8月29日の日記「イーザをつれてイーストボーンへゆく」。9月6日には「十二夜」、14日には「ハムレット」を観ている。この時期は作品と並行してたくさんの芝居、特にシェイクスピアのものを見に行っている。作品を芝居に近づけたい意図が強まっていることが考えられる。11月30日の日記には『シルヴィーとブルーノ』を正、続二つに分けることを決意した旨が書かれている。「1889年クリスマスに正編、90年クリスマスに、*More About Sylvie And Bruno* として出す。そのあと *All About Sylvie and Bruno* として廉価版で出すことも考えられる。」と書いている。

1889年3月18日の日記には「イースター休暇には全力投球をする。二部構成にすることをファーニスに手紙で知らせた。」とあり、28日の日記には「『リチャード三世』みる」。7月23日の日記には「イーストボーンで子どもと接するチャンスを得て好調。クリスマスまでには出来るだろう」。8月26日の日記には「ファーニスにかぶと虫を助けているあのシルヴィーの絵は使えない、と伝えた。(八頭身ではだめだ)しかしお金は払うつもり」と書いている。ドジスはファーニスにシルヴィーやブルーノの服装、履き物、身体丸みや釣り合い、過剰な愛嬌などに注文をつけ、ある時は妖精で、ある時はロンドンの社交界で通用するような姿、形を、それぞれ変幻自在に表現するよう要求した。8月29日の日記に「使えないと知らせた二枚の絵は描きなおしてくれることになった。」とあるが、そのころ二人の間には確執が生じていた。その間ドジスはアリス・ハヴァーズ(ノーマン夫人)というホジソン・パーネットの作品に挿し絵を描いていた画家に挿し絵を依頼していた。結局ドジスとファーニスは互いに譲歩するが、アリス・ハヴァーズの描いたロケットペンダントの絵が一枚ファーニスの挿し絵45枚とともに入っており、これは重要な絵として正、続編双方に登場している。(正、続編それぞれ挿し絵は46枚ずつである)。9月9日の日記には「正編、最終章書き終える。あとは会話を書き込むだけ」。10日のマクミラン社宛手紙には「クリスマスには無理だと思います」。10月6日の同社宛手紙には「印刷を10,000部では

じめ、乾かしている間に次の10,000部を印刷するのはいかがでしょう？20,000部一度に刷るほうが早いでしょうか？」11日の同社宛手紙には「クリスマスめがけて急ぎすぎると質の問題が心配です」（マクミランは、クレイが製本業者に完全な印刷コピーを12月2日までに渡せば、13日までに刊行出来る、と返事している。）10月30日の日記には「ファーンニスから、間に合わないとの電報。出版延期やむを得ない」。11月1日の日記には「『シルヴィーとブルーノ』製作の歴史は喧嘩の歴史だった、とマクミラン氏が言っていた」とある。15日の日記には「ファーンニス、9枚木版作成。クリスマスに間に合うとクーパー氏がうけあってくれた」。21日のマクミラン社宛手紙では値段を7シリング6ペンスにしたいと相談している。24日の日記には「『シルヴィーとブルーノ』の残りのシートを印刷にまわす。これですべて私の手をはなれた」。11月30日の日記には「クレイから最後のシート受け取る。すべてよし。マクミランは13日に上梓すると言った」。12月12日の日記には「『シルヴィーとブルーノ』150部受け取る。刊行はいよいよ明日だ」と記されている。

『シルヴィーとブルーノ』正編が1889年暮に刊行された時、批評家や読者の評判はノンセンス詩以外見るべきものはない、とけなした。長すぎる序文をはじめ、内容の面では、教会の説教や聖歌隊を儀式偏重とアーサーが批判している点、言葉の面では、一般的でない作者独自の綴り字を使っていること（例えば *ca'n't*, *wo'n't*, *traveler* など）やブルーノの幼児言葉などに批判が集まった。新しい手法とスタイルを第一の課題にしていたドジスンにとって、彼が予想した以上に読者が物語の突然の場面転換に戸惑っていることを知って、1890年1月大学報「セント・ジェームズ・ガゼット」紙に『シルヴィーとブルーノについて』という一文を寄せた。

読者は、この物語の突然の場面変化や「夢の国の子ども達」と思っていたものが実際の生活に入り込んだことに、作者が予想もしなかった難しさを感じたようです。もし妖精が存在し、それが人間の形をとることが出来たらどうなるかという前提で書いたことをこの場をかりて説明することは読者にとっても、私にとっても好都合だと思います。この物語のなかの「わたし」は三つの異なる場所を行き来します。つまり、(a)現実の生活、the ordinary

state, (b)彼が妖気を感じ、妖精を見ることが出来るところ, the eerie state, (c)夢見心地の状態で、彼の身体は明らかに眠っているのに魂は自由に妖精の国に入り、その時その場で起きていることを見ることが出来るところ, a form of trance です。<sup>21</sup>

ドジソンはその後、続編序文でも物語の構想をのべながら再びこのことに触れ、「この物語は、もし妖精が存在し、ときにそれが私たちの目に見え、私たちが妖精の目に見えたとしたら、また、妖精がときには人間の姿を借りることが出来たとしたら、さらに、人間が—— 密教に見られるように妖精の姿形のみえない本質 (インマテリアル エッセンス) が私たちに移って—— 時には妖精界で何が起きているかを知ることが出来たら、どんなふうになり得るかを示そうとした。」と言って、正編、続編の物語の中の重要な場面をあげ、それが上記三つのうちのどの状態で起こっているかを示し、その場面での人間界、妖精界の登場人物の状態も添えて表示した。その表を引用しておく (本文ページはナンサッチ版全集による)。

Vol.I.	Historian's Locality and	State.	Other Characters.	Vol.II.	Historian's Locality and	State.	Other characters.
pp.264-270	In train.....	c	Chancellor (b) p.264.	pp.474-482	In garden.....	b	S. and B. (b).
277-289	do. ....	c		496-498	On road.....	b	do. (b).
294-301	do. ....	c		498-511	do. ....	b	do. in Human form.
303-310	At lodgings.....	c		511-517	do. ....	b	do. (b).
314-318	On beach.....	c		547-578	In drawing-room.....	a	do. in Human form.
319-350	At lodgings.....	c	S. and B. (b) pp.338-341.	578-595	do. ....	c	do. (b).
			Professor (b) p.344.	603-607	In smoking-room.....	c	do. (b).
355-370	In wood.....	b	Bruno (b) pp.358-370.	623-626	In wood.....	b	do. (a); Lady Muriel (b).
pp.372-376	In wood, sleep-walking	c	S. and B. (b).	627-644	At lodgings.....	c	
383-385	Among ruins.....	c	do. (b).	646-669	do. ....	c	
389,390	do. dreaming	a		673-end.	do. ....	b	
391-393	do. sleep-walking	c	S. B. and Professor in Human form.				
393.....	In street.....	b					
398-406	At station, & c.....	b	S. and B. (b).				
410-421	In garden.....	c	S. B. and Professor (b).				
423-431	On road, & c.....	a	S. and B. in Human form.				
431-437	In street, & c.....	a					
439-450	In wood.....	b	S. and B. (b).				

ドジスンにとってこの作品の一番の眼目だった点が理解されず、落胆をかくしきれなかった彼は、一時続編の出版を見合わせていた。しかしマクミラン社の励ましや子どもの読者からの「あのお話は終わっていない。つづきが是非見たい。」という投書などに力を得て思い直し、アーサーに語らせた教会の説教や聖歌隊への批判については、登場人物の意見は作者の意見ではない、と批判を半ばかわしながら何とかして読者が理解しやすいよう挿し絵のなかの一部の登場人物（あるいは犬）を必要に応じて透明に見えるように描くなど正編にはない新たな工夫も試みた。

1891年2月27日の日記には「ウイニーの妹のイーニッド (Enid Stevens) に初めてあった。可愛らしい」。のちに『少女達への手紙』を編纂したイーヴリン・ハッチはイーニッドについて、画家ジョシュア・レノルズの描く天使みたいな女の子だった、と言っている。ドジスはイーニッドの名を各行の三文字目に読み込んだアクロスティックを書いて続編の献詩にした。また、ガートルード・トムソンにイーニッドの肖像画を描いてもらい、書斎の暖炉に飾っていた。

1892年1月30日の日記には「続編を毎日書いている。私も60才になった。空しくすごしたことを神よ、おゆるし下さい。」

この冬彼は膝の関節炎がひどくはじめてクライスト・チャーチで一人で年末年始を過ごしていた。7月31日の日記には「挿し絵は46枚考えているが、ファーニスはまだ36枚しか描いていない。クリスマスに間に合わなければ1893年のイースターでもよいことにしよう」。

1893年7月19日の日記には「イーストポーン。明日から続編に集中するつもり」。22日の日記には「ひたすら書いている」。11月21日マクミラン社宛手紙では（社はアレグザンダーからフレデリックにかわっていた）、続編の出版をためらっているドジスンに考え直すよう勇気づけている。しかしこのためらいは増刷中の『鏡の国のアリス』の絵の印刷が汚いことに驚いたドジスンが、片が付くまで続編は売り出しも宣伝もやめてほしい、と申し込んでドジスンが意図的にストップしていたことを意味している。11月21日の日記「ここ一ヶ月かかりっきりだったが、クリスマスには無理だ」。11月24日マクミラン社宛手紙「続編グミー届いた。とてもいい。」11月28日マクミラン社宛手紙「ファーニス続編46枚の挿し絵がおくれ、クリスマス・セールに間にあわず、刊行は12月29日

だ」。12月2日の日記には「続編のシート受け取ったが、前編の基準以下だ」。そして12月24日の日記に「完璧な続編1ダース届く。(続編が) やっと刊行された。正統あわせて421ページ、ファーニスの挿し絵46枚ずつ、7シリング6ペンスなり。」と書いて安堵感を漂わせている。

## V. 結

ドジソンは初め『シルヴィーとブルーノ』を全一冊で出版する計画だったが、挿し絵画家ファーニスのおくれもあって(続編には明らかに未完成と思われる挿し絵がいくつか見られる)二冊に分ける決心をしたことが1888年11月30日の日記に見られる。続編序文では1889年3月に二冊に分けるため一冊目の結末に苦労したことが書かれている。正編最後の場面は、ミュリエルとの恋に破れたアーサーがインドに行く決心を語るシーンで「わたし」がブラウニングの詩を引用するとアーサーがそれに応えて「そう、東方に目を向けよう!」と叫び、おりから曙光が朝の窓から差し込むところで終わる。最後のページには、日の出と暁の雲の挿し絵がある(日本語版にはその絵が入っていないのが残念である)。1867年5月11日の日記にあったドジソンのまぼろしの作品「暁の雲」がここに持ち込まれた可能性が考えられる。いっぽう続編の最後を締めくくるのは夕空を背景に、シルヴィーの赤いロケットペンダント(Sylvie will love allと刻印がある)が青(All will love Sylvieと刻印)に変わる場面で、その謎が父親によって解かれる。なぜ赤が青になったかを尋ねるブルーノにシルヴィーは“It is love.”とこたえて物語は終わる。そこには二人が日没を見つめている挿し絵がある。この二枚の挿し絵は時間的なつながりをあらわしており、あたかも正、続編が人の一生を、暁(赤)から夕暮れ(青)までを扱った一つの芝居であるかのように感じさせている。物語に二つのレベルをもたせたこと、トリックスターとしての庭師を登場させたことなどは演劇効果を高めるものであり、わかりにくいと批評された場面転換もダブルプロットも妖精の存在も演劇的粋で見れば、一つに融合される。これこそモートン・コーエンが言う融合の達人ドジソンの真骨頂であろう。

「夢」や「眠り」を生涯のテーマにしていたドジソンが、究極にたどり

ついたのが『シルヴィーとブルーノ』の「暁の雲」や「夕暮れ」の場面に象徴される「愛のテーマ」だった。その一連のテーマのつながりはノンセンス作家として名高い彼の作品の中では周縁にある真面目な詩や物語の序詩、献辞、序文、あとがきなどに共通して見られ、そのまま最後の長編の本質になった。続編では多くの議論がさらに深まり、罪の概念、慈善の本質などヴィクトリア朝期のイギリスがかかえていたジャーナリストティックな問題にまで広がっている。

先にも述べたが刊行直後の反響はかばしくなく、ドジスの想像力の枯渇、序文の冗漫さ、男女の物語としての常套的退屈さ、シーンが入り乱れて解釈困難、表記法、ブルーノの子ども言葉などに不満が集まり、見るべきものはノンセンス詩だけ、と評されたが、ドジスはこの不評に、1894年5月24日マクミラン社に「宣伝がたりないから（続編が）売れないではありません。お金の無駄ですから、もう宣伝しないで下さい。書評がさんざんだとは知りませんでした。もし書評氏が正しいのなら、この本は本当に値打ちが無いのでしょうか。もし彼等が間違っているとしたら、いつかきつとこの本の良さが人づてに伝わり、読まれるようになるでしょう。」と手紙を書いている。しかし実際には、1894年1月27日の「サタデー・レヴュー」紙の書評のように「これは『アリス』と同じユーモアやファンタジーあふれる夢物語であり、創造性、妖精らしさ、ユーモア、精巧なファーンイスの挿し絵などいづれも素晴らしい」と誉めたものもあった。1904年になってドジスの末弟エドウィンは、子どものために妖精物語の部分を一冊にまとめ出版したが、さほどの効果はなかった。

同時代人による以上のような批判は、当時の評者の想像力、理解力、好奇心、冒険心などの貧困の裏返しに過ぎない。時代がドジスに追いつかなかつたのである。幼児語や意識の流れの手法、夢分析、心理小説、SF小説、演劇的手法、モンタージュ手法、カメラ・アイの手法、メタフィクションなど、以後新しいものとして登場する数々の実験をドジスは時代に先駆けてやってしまったのである。

このように見てくると『シルヴィーとブルーノ』は、家庭回覧雑誌の最初の詩「ぼくの妖精」（1845年）を第一ページとする、マルチ・タレント、チャールズ・ドジスの思考の挿し絵をふんだんに持つ一大ノンフィ

クションと見ることも出来るのではないだろうか。これこそドジスンを知るための宝箱なのであるから、彼が期待したように今後新しい読みが広がるであろう。

(本稿は1998年度北星学園大学特別研究費による研究をまとめたものである。)

〔注〕

1. 北星学園大学文学部, 北星論集第22号, 1984, pp.199-223.
2. 同上, 第34号, 1997, pp.63-94.
3. R. L. Green, *Diaries of Lewis Carroll*, Greenwood Press, 1971, p.53.
4. Morton Cohen, *The Letters of Lewis Carroll*, Macmillan, 1979, p.17.
5. Lewis Carroll, *Lewis Carroll, Complete Works*, Nonesuch, 1973, pp. 1109-1113. 訳はH・ガーンズハイム著, 人見, 金沢訳『写真家ルイス・キャロル』(青弓社, 1998)を参考にした。
6. J. Pudney, *Lewis Carroll and his world*, Themes and Hudson, 1976, p.49.
7. 図2, 図4, 図5, 図6の写真はいずれも *Lewis Carroll, La collection Photo Poche*, 1998 Edition, Nathan Paris による。
8. *Complete works*, p.257.
9. Jack Zipes, *Modern Fairy Stories*, Routledge, 1987, p.75.
10. D. Cruch, *Lewis Carroll Handbook*, Dawson/Archon, p.45.
11. Pudney, p.111.
12. S. D. Collingwood, *The Life and Letters of Lewis Carroll*, T. Fisher Unwin, 1898, p.109.
13. Morton N. Cohen & Anita Gandolfo, *Lewis Carroll and the House of Macmillan*, Cambridge U. P. 1987, p.133.
14. Richard Kelly, *Lewis Carroll*, Twayne Publishers, 1977, p.112.
15. Anne Clark Amor, *Lewis Carroll A Biography*, Dent & Sons, 1979, p.258.
16. "Feeding The Mind", Privately Printed by S. H. Goodacre, 1984, p. 20.
17. Anne Clark Amor, p.257.
18. Helmut Gernsheim, *Lewis Carroll, Photographer*, Max Parrish, 1949, p.79.



19. *Lewis Carroll and House of Macmillan*, p.215.
20. *The Letters of L. Carroll*, p.686.
21. R. L. Green, *The Story of Lewis Carroll*, Methuen & Co., 1954, pp. 153-154.
22. *Lewis Carroll and the House of Macmillan*, p.306.